「愛するものを亡くした哀しみを癒すことはできない」ということ
村上春樹『ノルウェイの森』の「直子」考

石原　深予

“No truth can cure the sadness we feel from losing a loved one”
—A Study on Naoko in Haruki Murakami's *Norwegian Wood*

Miyo Ishihara

Abstract

This study focuses on Naoko, one of the heroines of Haruki Murakami’s *Norwegian Wood*. This paper comprises four sections. Section one discusses Naoko's auditory hallucinations and indicates that there are scenes in which “I” does not appear to be talking about them. Section two discusses Naoko’s schizophrenia and “I’s” acceptance of her illness, including why “I” conceals Naoko’s illness when “I” talks about Naoko. Section three discusses the factors responsible for the suicide of Kizuki, Naoko’s lover and “I’s” best friend, and how Naoko dealt with it. Section four discusses “I’s” perception that Naoko and “I” were bound together at "the border between life and death," and what Naoko, who opted to die, gave and shared with “I.”

はじめに

村上春樹『ノルウェイの森』（講談社　1987.9）は、村上春樹の他作品のように幻想的で非現実的な物語の展開をとらない。しかしこの作品には、語り手で主人公である「僕」ことワタナベが非現実的な体験をしていると解釈できる記述が第十一章にある。「僕」が、愛した女性である直子の死後、直子の生前の姿を回想している場面に続く記述である。

> 僕はどうしても眠れない夜に直子のいろんな姿を思いだした。思い出さないわけにはいかなかったのだ（略）
>
> そんな風に彼女のイメージは満ち潮のように次から次へと僕に打ち寄せ、僕の体を奇妙な場所へと押し流していった。その奇妙な場所で、僕は死者とともに生きた。そこでは直子が生きていて、僕と語りあい、あるいは抱きあうこともできた。その場所では死とは生をしめくくる決定的な要因ではなかった。そこでは死とは生を構成する多くの要因のうちのひとつでしかなかった。直子は死を含んだままそこで生きつづけていた。そして彼女は僕にこう言った。「大丈夫よ、ワタナベ君、それはただの死よ。気にしないで」と。

そんな場所では僕は哀しみというものを感じなかった。死は死であり、直子は直子だからだった。ほら大丈夫よ、私はここにいるでしょ？　と直子は恥かしそうに笑いながら言った。いつものちょっとした仕草が僕の心をなごませ、癒してくれた。そして僕はこう思った。これが死というものなら、死も悪くないものだな、と。そうよ、死ぬのってそんなたいしたことじゃないのよ、と直子は言った。死なんてただの死なんだもの。それに私はここにいるとすごく楽なんだもの。暗い波の音のあいまから直子はそう語った。

しかしやがて潮は引き、僕は一人で砂浜に残されていた。僕は無力で、どこにも行けず、哀しみが深い闇となって僕を包んでいた。そんなとき、僕はよく一人で泣いた。泣くというよりはまるで汗みたいに涙がぼろぼろとひとりでにこぼれ落ちてくるのだ。

この「奇妙な場所」を「僕」による空想や夢で見た場所ではなく、「僕」が現実的な感覚のまま訪れた場所であると解釈すると、そこは日常現実とは次元の異なる場所である。ここは海辺から「僕」が「押し流」されていったという場所で、「僕」が哀しみを感じないでいられて、死者である直子もまた「すごく楽」でいられるという居心地の良さがあり、二人にとっては幸福な場所である。したがって、この「奇妙な場所」とはいわゆる常世の国、海の彼方にあると考えられる理想郷的な場に類する場所で、死者がいて、なおかつ生者が場合によってはたずねることが可能となる、死者と生者とが一時的に共存することのできる、日常現実とは次元や位相を異にする場所であると考えられる[1]。

この「奇妙な場所」に至る前の「僕」は、直子の葬儀後三日間映画を見てから、銀行預金を残らずおろして新宿駅から最初に目についた急行列車に乗り、放浪の旅を続けていた。引用の場面は「僕」が山陰の海岸を歩いて旅をしていた夜の出来事である。「よく一人で泣いた」と語られたように、「僕」が「奇妙な場所」へ出入りするのは幾晩も繰り返された。「僕」の語る「その場所では死とは生をしめくくる決定的な要因ではなかった。そこでは死とは生を構成する多くの要因のうちのひとつでしかなかった」とは、「僕」が十七歳のときに体験した、「僕」の親友であり直子の恋人であったキズキの自殺によって「僕」が「身のうちに感じ」「言葉に置きかえ」たらこういうことだという「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」という認識に類する。

---

[1] 芳川泰久「失われた冥府――あるいは村上春樹における<喩>の場処」(『ユリイカ』臨時増刊号 1989.6　21–8）は 「奇妙な場所」について「あくまでも僕を襲う「イメージ」の世界という<ここ>にほかならず、断じて冥府ではない」「物語の<いま・ここ>とは異なる場所としての冥府というトポスを決定的に喪失する」「冥府というテクストの異界を召喚することなく死者たちについて書くことができるエクリチュール」等と論じるが、本稿はこの解釈に拠らない。また南富鎮『村上春樹　精神の病と癒し』（春風社　2019）第 6 章「分裂症、森田療法、反精神医学、旅路の始まり ――『ノルウェイの森』」はこの場面について、「現実の旅の形態を取っているものの、隠喩的には、あるいは精神病理学的には、レインのいう異時間と異空間への内面的な旅路を指しているように思われる。つまり、僕の旅路は実在の旅というより、僕の内面における異質な時間と空間の発生であり、その発達過程でもあり、一時的な終結を表しているように思われる」と論じる。南論文のようにこの場面を「僕」の「内面的な旅路」「内面における異質な時間と空間の発生」と解釈する場合、この場面はあくまで「僕」の内面のイメージや夢の世界となるが、本稿ではその解釈をとらず、この場面を「僕」が日常現実とは異なる次元の場所をおとずれた場面であると解釈する。

「僕」はこの「奇妙な場所」に出入りした結果、「死」について新たな認識を得て次のように語る。

> 直子の死が僕に教えたのはこういうことだった。どのような真理をもってしても愛するものを亡くした哀しみを癒すことはできないのだ。どのような真理も、どのような誠実さも、どのような強さも、どのような優しさも、その哀しみを癒すことはできないのだ。我々はその哀しみを哀しみ抜いて、そこから何かを学びとることしかできないし、そしてその学びとった何かも、次にやってくる予期せぬ哀しみに対しては何の役にも立たないのだ。僕はたった一人でその夜の波音を聴き、風の音に耳を澄ませながら、来る日も来る日もじっとそんなことを考えていた。

このように「僕」は幾晩も生者と死者とが共存できる「奇妙な場所」へ出入りし、そこから生者のみが住まう日常現実の世界に戻る。そして生者である「僕」は生者と死者との居場所の違いという断絶から「どのような真理をもってしても愛するものを亡くした哀しみを癒すことはできない」という認識を得た。村上春樹が「この小説はあえて定義づけるなら、（筆者注：恋愛小説というより）成長小説という方が近いだろうと僕は思っている」（村上春樹「自作を語る　１００パーセント・リアリズムへの挑戦」　『村上春樹全作品　1979～1989』第6巻　講談社　1991　所収）というのにしたがうのなら、直子の死が「僕」に教え、「僕」の得たこの認識が、「僕」の成長の証であると思われる。

第一章を振り返ると、「僕」がこの文章を書き始めたのは「直子との約束を守るため」すなわち直子のことを「いつまでも忘れない」「ずっと覚えている」ためにである。仮に「僕」から直子の具体的な記憶が失われてしまったとしても、「僕」にとって抽象化された直子としての「愛するものを亡くした哀しみを癒すことはできない」という認識は、「僕」の魂のうちに残るだろう[2]。

---

[2] 『ノルウェイの森』と同年に発表された山田太一『異人たちとの夏』（1987 年発表、1988 年映画化）について、著者の山田太一は次のように述べている。「この小説はセンチメンタリズムを主題にしています。偽の感情ですね。本質的ではなく、一時的な感情。センチメンタリズムを偽の感情だとして抑圧したことによって、我々はすごく障害を受けているという感じがする。ですから、センチメンタリズムをちゃんと認知しようじゃないかと思ったんです。それは一時的なものだけど、恋愛だって夫婦愛だって一時的なものなんだし。だいたい今、本質的なるものが疑われている時代だし、うさん臭く思われている。僕は偽の感情をすくい取ってみようと思ったんです。だけど、ストレートにリアリズムでそれに溺れるわけにはいきません。いい歳をした男がセンチメンタリズムに溺れた小説なんて誰も読んでくれない。それで、非リアリズムを介することによって、それを開放してみよう。それは僕にとっては、偽の感情ではなく、一時的にせよ、切実なものがあるんですね。それを今、受け入れないと障害を起こしてしまうという現実が日本にはあると思う。この小説は謙虚にいうのではなくて、センチメンタリズムに溺れる話なんです」。（山田太一・市川森一・大林宣彦・石上三登志「特集 異人たちとの夏 座談会 現実と非現実の狭間で」 『キネマ旬報』1988 年 9 月上旬号 キネマ旬報社 1988・9・1）『ノルウェイの森』の直子はセンチメンタルな人物としては表象されないが、死後にその音楽の好みをレイコさんから「センチメンタリズムという地平をはなれなかった」と評される。また昭和末期の同時代状況へ『異人たちとの夏』が批評性を有していることについて長谷正人が次のように指摘している。「八〇年代には、そういう人間の後ろ向きの感受性（筆者注「死者にもう一度よみがえってほしいという人々の切実な思いをファンタジーとして描くこと」）を馬鹿にするような雰囲気があった。（略）内向的な人間をネクラという言葉で侮蔑した。」「ネアカを装って笑っていればいいというような躁的な社会のなかで、その静けさ=孤独はなかなか聞

本稿は『ノルウェイの森』のヒロインの一人である直子に焦点をあてて論じる。これまでに『ノルウェイの森』が論じられた場合、直子と緑のヒロイン二人ともを論じたものが大半であるのは当然ながら、緑に焦点をあてて論じた近藤裕子「チーズ・ケーキのような<緑>の病――村上春樹『ノルウェイの森』論」（近藤裕子『臨床文学論　川端康成から吉本ばななまで』　彩流社　2003　所収　初出『国文学　解釈と教材の研究』臨時増刊号　1998.2）はあったが、もう一人のヒロイン直子にフォーカスして論じるものはなかった。また直子が論じられる場合、村上春樹の他作品に登場する、類似する人物等と関連させて論じられることも多かった。そこで本稿では他作品の登場人物等とは関連させずに、『ノルウェイの森』の作品内における直子について、彼女がどのように表象されているかを、「僕」との関係を含めて論じる。

本稿は4節から成る。第1節では直子の幻聴について検討し、それを「僕」が語っていないと考えられる場面があることを指摘する。第2節では直子が統合失調症を病んでいると見立てられることより、直子の病の様相と「僕」による直子の病についての認識、また「僕」が幻聴に限らず直子の病的な症状を隠蔽しながら語っていると考えられることとその理由について考察する。第3節では直子の恋人であり「僕」の親友であったキズキの自殺の要因について検討し、直子がキズキの自殺にどう向き合ったかを論じる。第4節では直子と「僕」とが「生死の境い目」で結びついていたという「僕」の認識について検討し、死を選んだ直子が「僕」に分かち与えたものについて論じる。

1　直子の幻聴

本節では「僕」が語らなかったと考えられる、直子の「幻聴」について検討する。

「僕」と直子との関係を出会いから東京での再会までを時系列で並べると、次のようになる。

一九六六年、「僕」は高校二年生の春に同級生のキズキと知り合い、すぐに気があった。キズキは「僕」にとって「その前にもそのあとにも友だちと呼べそうな人間なんて」いないという唯一の

き取られることはなかった」。（長谷正人『敗者たちの想像力 脚本家 山田太一』 岩波書店　2012）このような批評性を持つ物語が当時要請されていたと言えよう。そして『ノルウェイの森』が含有するそのような批評性もまた時代の要請に応えたと言えるだろう。なお平野芳信「最初の夫の死ぬ物語　『ノルウェイの森』から『こゝろ』に架ける橋」（『漱石研究』9　1997）は、大塚英志『人身御供論――供犠と通過儀礼の物語』（新曜社 1994　『人身御供論 通過儀礼としての殺人』角川文庫　2002）による、1980年代後半に発表された共通の構造的特徴を有する著名コミック群の根底に説話「猿婿入」の話型が見出せるという指摘を踏まえて、『ノルウェイの森』にもその構造が見出せることを指摘しているが、『異人たちとの夏』にも同様にその構造が見出せる。

くわえて『異人たちとの夏』と同年1988年に上映された宮崎駿監督『となりのトトロ』および同時上映作である高畑勲監督『火垂るの墓』もやはり昭和末期という時代への批評性を有する。『火垂るの墓』の原作小説である野坂昭如『火垂るの墓』は1967年発表、1968年刊行作品で、これは『ノルウェイの森』で回想された時期と重なり作品の舞台も神戸である。『ノルウェイの森』のもととなった短編小説『螢』と「火垂る」との、表記は異なるものの「ホタル」というモチーフが共通することも興味深い。以上、『ノルウェイの森』と『火垂るの墓』以外の事柄については拙稿「孤独の受容、救済の物語――山田太一『異人たちとの夏』論」（『論潮』10　2017）での指摘に拠る。

友人となり、「僕」はキズキに心を許していた。友人となってすぐにキズキは同年の幼なじみで恋人である直子を「僕」に会わせる。その頃の直子は「ミッション系の品のよい女子校」に通っており、「いつも華やかな服を着て、沢山の友だちに囲まれていた」。「僕」はその後キズキと直子と三人と過ごす時間を持つようになるが、「僕」と直子は二人きりになると「相性がわるいとかそういうのではなく、ただ単に話すことが」ないため、「いささか居心地が悪」い思いをするという関係であった。

翌一九六七年、キズキは高校三年生の五月に自殺する。その死にあたって遺書は残されず、「僕」には思いあたる動機もなかった。「僕」と直子はキズキの葬式の二週間ばかりあとで「ちょっとした用事」のために一度だけ顔をあわせ、用事が済むと話すことはなかった。そのときの直子は「僕に対してなんとなく腹を立てているように見えたが、その理由は僕にはよくわからなかった」という。その後「僕」と直子は会うこともなく、それぞれ翌一九六八年郷里の神戸から上京し、東京で大学に通い初めて間もなくの五月半ば、二人はたまたま再会した。

以上を辿ると、「僕」がキズキと直子の二人と知り合っておよそ一年後にキズキが自殺し、その後直子と会わずに過ごしたおよそ一年を経て後に、「僕」は直子と偶然に再会している。それから二人は直子の「私たちまた会えるかしら？」という提案を「僕」が受けた形で、ほとんど毎週日曜ごとに会うようになり、徐々に互いに馴れていった。仮に二人が親交したキズキの自殺という共通の体験と記憶がなくても、ある共通の親しい人間を介して、さほど親しくはなくても一定期間を共に過ごした高校時代の郷里の知人に、大学進学先の東京で再会してたびたび会うようになり次第に親しくなっていくこと自体は、自然な関係であると言える。

また二人が「過去の話を一切」せず「あまり多くはしゃべらなかったし、その頃には二人で黙りこんで喫茶店で顔をつきあわせていることにもすっかり馴れてしま」い、そして「キズキという名前」が「殆んど我々の話題にはのぼらなかった」ということも、辛い記憶を共有する者同士としてそれをわざわざ話題にしないことは自然である。

ただここで注意したいのは、「殆ど」ということはゼロではなく、キズキの名前は二人の会話に出たのである。しかしそれがどういう話題であったか「僕」は語らない。「僕」は「その頃我々がどんな話をしていたのか、僕にはどうもうまく思い出せない」と語る。ここで第一章を確認すると「僕」は次のように語っている。

> 記憶を辿りながら文章を書いていると、僕はときどきひどく不安な気持ちになってしまう。ひょっとして自分はいちばん肝心な部分の記憶を失ってしまっているんじゃないかとふと思うからだ。僕の体の中に記憶の辺土（リンボ）とでも呼ぶべき暗い場所があって、大事な記憶は全部そこにつもってやわらかい泥と化してしまっているのではあるまいか、と。

キズキの名前が二人の会話にあがった時の話題は、「僕」が失っている「肝心な部分の記憶」の一つかもしれないが、あえて「僕」が語っていないとも考えられる。

さて「過去の話を一切しな」いのに、すでに死んだ過去の人間であるはずのキズキの名前が、現

在の話題として出て来る場合があるなら、「僕」ではなく直子が話題に出したのではないだろうか。

その当時の二人の関係において「僕」は、「僕」なりに直子を傷つけないよう気をくばっており「もしできることなら直子を抱きしめてやりたいと思うこともあったが、いつも迷った末にやめた。ひょっとしたらそのことで直子が傷つくんじゃないかという気がしたからだ」と語ってもいる。また「直子の笑顔を目にするのは僕としてもそれなりに嬉しいことではあった」がために、直子が笑う<突撃隊ジョーク>という話題を、「あまり気持の良いものではなかった」のにいつも提供していた。これらから「僕」がわざわざ直子に、直子を傷つける可能性のあるキズキの話をしたとは考えにくい。とすれば、直子が「僕」にキズキの話をすることがあったのだと考えられる。

とはいえ「僕」は「うまくしゃべることができない」という個人的な体験を真剣に語る直子の話を「誰にでもある」と一般化して応対し、「それとはまた違うの」と「がっかりしたみたい」な様子で直子から返答されている。直子に気をくばっているようでありながら、直子の個人的で真剣な話をはぐらかしてもいる「僕」は、直子がキズキの名前を会話に出しても、それを受けとめることが出来なかったのではないだろうか。ただ直子ほどではなくともキズキの死を重く受け止め、その死に深く傷つきながら「深刻になるまいとも努力していた」という「僕」には、直子がキズキの話をしたところで、それを受容しキズキの話題に応じるほどの余裕はなかっただろう[3]。

そのように「僕」が受けとめられないような、「過去の話」ではない「現在」のキズキの話を直子が「僕」にしたとすれば、それは死者であるキズキが話しかけてくるという直子の体験、つまり一般には病的な幻聴と解釈される体験ではなかっただろうか。

「僕」と直子が大学二年生になった一九六九年四月頃から直子は大学を休学し、いったん神戸の実家に戻ったのち七月か八月頃「京都の山の中」にある精神科医療の療養施設である阿美寮に入る。直子はそこでレイコさんという三八歳の女性のルームメイトとして同室で暮らし始める。一九七〇年三月三一日付けでレイコさんが「僕」宛てに書いた、「僕」が一九七〇年四月四日に読んだ手紙の内容を信用するなら[4]、一九六九年の「十一月のおわりか、十二月の始めころ」から直子は「うまく手紙が書けなくなって」きて「それから幻聴が少しずつ」始まったという。直子が「手紙を書こうとすると、いろんな人が話しかけてきて手紙を書くのを邪魔する」という。またそれ以前に「僕」が阿美寮を初めて訪ねた一九六九年の一〇月、レイコさんは「僕」に「あの子はもっと早く治療を受けるべきだったのよ。彼女の場合、そのキズキ君っていうボーイ・フレンドが死んだ時点から既

---

[3] 「はじめに」前掲の近藤論文は、「直子の話が核心に触れようとすると、「僕」の理解は急に表層的になり、共感性も失われてゆく。「僕」は直子個人の問題を、まず「誰にでも」「みんな」という言葉に置き換えることによって一般論へと拡散させる。そして、「正確に表現できなくて」という言葉で結ぶことによって、存在論を表現の問題にすり替えてしまう。こうした表層化・一般化は、セルフの問題で苦しむ直子を失望させるだけだ。彼女は、開いてはいても聴きとろうとはしていない耳の前で、自ら説明の言葉を呑み込むほかない。（筆者注改行）「僕」のこのような<深く理解することに対する拒否>は、カウンセリング小説と称せられる『ノルウェイの森』において、実は随所に見いだすことができる」と論じる。

[4] 武内佳代「語り／騙りの力——村上春樹『ノルウェイの森』を奏でる女」（『日本近代文学』83　2010.11）はレイコさんを虚言症の病者として解釈し、作品を読みかえる。なお先立って渡辺みえこ「『ノルウェイの森』の直子はなぜ死んだのか」（渡辺みえこ『語り得ぬもの：村上春樹の女（レズビアン）性表象』 御茶の水書房 2009所収）もレイコさんのレズビアン体験が虚言である可能性を指摘する。

に症状が出始めていたのよ。そしてそのことは家族もわかっていたはずだし彼女自身にもわかっていたはずなのよ。家庭的な背景もあるし……」と話していた。ここで「僕」は「家庭的な背景」という初めて聞く事情に驚いてレイコさんに訊き返しているが、「症状」については訊き返していない。これは「僕」が一九六九年四月に直子の誕生日を直子の下宿にて二人で祝った夜、珍しくよくしゃべる直子のしゃべり方のおかしさ、そのしゃべり方が「不自然で歪んでいる」ということに気づいていたからでもあろう。

しかしここでレイコさんが言っている「症状」とは、しゃべり方ではなく幻覚や妄想を指すのではないだろうか[5]。直子自身は一九六九年十一月に「僕」に宛てた手紙で次のように、死者であるキズキと話す体験を記している。しかしそれは異常であったり恐怖を呼び起こしたりする体験としてではなく、日常現実の自然な体験として記されている。また、こんなことを書くとあなたは驚くかもしれないけれどといった「僕」への配慮の弁もない。

> 私が淋しがっていると、夜に闇の中からいろんな人が話しかけてきます。夜の樹々が風でさわさわと鳴るように、いろんな人が私に向って話しかけてくるのです。キズキ君やお姉さんと、そんな風にしてよくお話をします。あの人たちもやはり淋しがって、話し相手を求めているのです。

以上より、東京で、過去の話ではなく現在の話としてキズキの話を直子が「僕」にしたとすれば、死んだキズキが話しかけてくるという直子の体験ではなかっただろうか。

「家族もわかっていたはずだし彼女自身にもわかっていたはず」であるなら、大学一年生の間、東京で直子とたびたび接した「僕」も、直子からその体験について聞いたり、あるいは死んだキズキが話しかけてくるのに応答する直子を見ることがあったとしても不思議ではないだろう。したがって「僕」は直子の幻聴を、直子が休学する以前に気づいていたのではないだろうか。

2　直子の病の様相と、「僕」の語りによる直子の病的な症状の隠蔽

先述した直子の手紙にあるように、自殺した死者であるキズキや姉から話しかけられるという二〇歳の直子の体験は、直子自身にとってはリアルな体験として受けとめられている。しかし直子の体験は、他者からは幻覚・妄想という病的な症状と見なされるものであった。本節では直子の体験を「僕」が「病」として認識していることを確認し、次に直子の病の様相について確認したうえで、「僕」が直子の「病」を隠蔽しつつ語っていることの理由を考える。

---

[5] 注１前掲南論文では、直子の症状と病歴から、統合失調症（当時は精神分裂病）ではないかと推測し、レイコさんは統合失調症ではなく神経症系統に分類されうると推測する。レイコさんの病については推測しかねるが統合失調症ではないという推測には同意する。また直子の病の見立てについても同意する。

２―１　「僕」による直子の「病」の認識

前節で引用した一九六九年十一月の直子の手紙には、死者が直子に話しかけてくる体験を「僕」から拒絶されることを危惧する記述はない。その前月一〇月に「僕」が阿美寮を訪ねた際、「僕」と直子が二人きりで過ごした場面が第六章で語られるが、そのとき直子が「僕」に話したであろう幻覚や妄想といった病的な症状を「僕」は拒絶せず、「僕」は直子の体験を「病」として受容している。そのことをまず確認する。

第六章では第一章で語られた草原の場面が省かれて語られる。その場面は二人の性行為のあとに「僕らは草原を抜け、雑木林を抜け、また草原を抜けた」と語られた時間のどこかだと考えられる。というのは第一章の草原の場面で直子は「僕」への二つの「おねがい」として、「僕」が直子に会いに来たことに対して感謝していることをわかってほしいということと、「私のことを覚えていてほしい」「いつまでも私のことを忘れないで」ほしいということを告げる。そして第六章の「草原を抜け、雑木林を抜け、また草原を抜けた」あとの場面で直子は、彼女が小学校六年生の十一月、十二歳の時に六つ年上の姉が十七歳で自殺したことを「僕」に初めて打ち明け、それを踏まえて「あなたが思っているより私はずっと病んでいるし、その根はずっと深い」という自己認識を語る。だから自分の回復を待たせることによって「僕」を自分の人生の道づれにはどうしてもしたくない、「僕」をふくめて誰の人生の邪魔もしたくないと言い、「さっきも言ったようにときどき会いに来て、そして私のことをいつまでも覚えていて。私が望むのはそれだけなのよ」と言う。「さっきも言ったように」と直子が指すことが、第一章の草原の場面での「おねがい」についての会話だろう。

そうすると第六章で語られる内容には、この二人きりの時間のなかで、二人が話した別の会話の記憶も省かれていたり、あるいは「僕」の記憶から薄れて「僕」には思い出せなくなっていることもあり、「僕」が語らない直子との会話の内容には、直子が死者から話しかけられる体験も含まれたのではないだろうか。

それは「まるでキズキ君が暗いところから手をのばして私を求めているような気がするの。おいナオコ、俺たち離れられないんだぞって。そう言われると私、本当にどうしようもなくなっちゃうの」という、「ような気がする」と認識されながら「そう言われると」と現実に言われているようなリアリティのある体験として語る、「たまらなく怖くなる」体験も含まれる他方で、前掲したその後の十一月の手紙に書かれたような、恐怖と見なされないような体験もあったのではないか。

自分とかかわりあうことで「僕」の人生の邪魔をしたくない、自分とかかわりあいになることは人生の無駄だと主張する直子に対して「僕」は、「僕は何も無駄になんかしてない」と反論し、「君は怯えすぎてるんだ」「暗闇やら辛い夢やら死んだ人たちの力やらに。君がやらなくちゃいけないのはそれを忘れることだし、それさえ忘れれば君はきっと回復するよ」と言う。この「暗闇やら辛い夢やら死んだ人たちの力やら」が、直子が具体的に「僕」に話したことだろう。その傍証として第一章で直子が語った井戸の話について、「あるいはそれは彼女の中にしか存在しないイメージなり記号であったのかもしれない――あの暗い日々に彼女がその頭の中で紡ぎだした他の数多くの事物と同じように」と「僕」が解釈していることが挙げられる。「彼女がその頭の中で紡ぎだした他

の数多くの事物」とは、直子の頭の中だけにあると見なされる、直子の病的な症状である幻覚や妄想として「僕」に理解された事物だろう。

２―２　直子の病の様相と、「僕」の語りによる直子の病の隠蔽とその理由

「暗闇やら辛い夢やら死んだ人たちの力やら」と「僕」が直子に言う時点以前に、直子が「僕」に話したと語られる「暗闇」「辛い夢」「死んだ人たちの力」がどのようなものかを具体的に確認する。

まず直子が「ノルウェイの森」を聴いて感じる印象である。「この曲聴くと私ときどきすごく哀しくなることがあるの。どうしてだかはわからないけど、自分が深い森の中で迷っているような気になるの」「一人ぼっちで寒くて、そして暗くって、誰も助けに来てくれなくて」という印象で、ここで「暗さ」が語られる。

二つ目は、暗い、辛い、死んだ人という三点全てが確認できる、キズキについての言を含む一連の発話である。「ときどき夜中に目が覚めて、たまらなく怖くなるの」「こんな風にねじ曲がったまま二度ともとに戻れないと、このままここで年をとって朽ち果てていくんじゃないかって。そう思うと、体の芯まで凍りついたようになっちゃうの。ひどいのよ。辛くて、冷たくて」「まるでキズキ君が暗いところから手をのばして私を求めているような気がするの。おいナオコ、俺たち離れられないんだぞって。そう言われると私、本当にどうしようもなくなっちゃうの」。

そして井戸の話では、暗さと死者について語られる。直子はその井戸の底について「暗くてじめじめしていて。そして上の方には光の円がまるで冬の月みたいに小さく小さく浮かんでいるの」という暗さを語り、「冬の月」を直喩として用いて寒さや冷たさをも連想させる。直子の語る「暗さ」には、「ノルウェイの森」にしてもキズキにしても、寒さや「体の芯まで凍りついた」というような冷たさが伴うのが特徴である。

さらに直子は井戸の底にいるかのように「まわりにはムカデやらクモやらがうようよいるし、死んでいった人たちの白骨があたり一面にちらばっている」「声を限りに叫んでみても誰にも聞こえないし、誰かがみつけてくれる見込みもない」という、不気味で他者との連絡が不可能な場であり、そして「一人ぼっちでじわじわと死んでいく」場として井戸を語る。とはいえ直子は、そのような井戸があるところにいても「僕」にしっかりとくっついていれば、「ちっとも怖くない」「どんな悪いものも暗いものも私を誘おうとはしない」と語る。その悪いもの暗いものは具体的ではないが、それらは直子を隠喩的に「本当に深い」井戸に落ちることを誘うもの、つまり「死」へといざなうものとして直子は語り、「僕」は「死」へといざなうものから直子を守る者として、直子にイメージされている[6]。

---

[6] 今井清人「『ノルウェイの森』――回想される<恋愛>、もしくは死――」（今井清人『村上春樹――OFF の感覚――』 国研出版　1990）は、引用の井戸について語るシーンで直子が「僕」に「あなたにくっついているかぎり、私も井戸には落ちないの」と言ったことを、「「僕」と一緒にいれば現実と辛うじて繋がっていられる

しかし直子にとって「僕」は両義的な存在である。上記の他方で直子は「私はあなたが考えているよりずっと深く混乱しているのよ。暗くて、冷たくて、混乱していて……ねえ、どうしてあなたあのとき私と寝たりしたのよ？　どうして私を放っておいてくれなかったのよ？」と「僕」を責める。直子は性交によって、深さ、暗さ、冷たさという井戸と同じイメージを自身にもたらし混乱に陥らせた、つまり死の淵へと自身を追いやった者として「僕」を認識してもいる。

直子は「僕」をそう責めたあと「あなたを傷つけるつもりはなかった」「自分に腹を立てていただけ」と弁明するが、内的な認識は「僕」との性交によって自身が深く混乱したということである。「僕」は直子と寝た翌朝、直子について「唇は一切の言葉を失い、その体は凍りついたように固くなっていた」と認識していた。「僕」のこの認識と直子自身の「暗くて、冷たくて、混乱していて」という自己認識とは共通している。そして直子が「暗くて、冷た」い、体が「凍りついたように」なっている状態とは、直子が死に近い状態にあるということを示している。直子にとって「僕」との性交は、エクスタシーを伴った体験でありながら、その後に死へと接近する体験でもあったのであり、その恐怖が直子の身体をしてふたたび性的に開かせないことになったのは肯われる。なお愛するキズキとは不可能であった性交が、愛していないはずの「僕」とは可能であったことによる直子の混乱は、異性のパートナーとして愛する対象と性愛の対象とは一致しているべきだというロマンティックラブイデオロギーの内面化も一因だろう。

最後に姉についてである。ここでも辛さは語られない。十二歳の直子は首吊り自殺をした姉を発見し、顔も含めて「全部見ちゃった」という。「放心状態で。何が何やらわけがわからなくて。体の中の何かが死んでしまったみたい」な状態となり、母が見に来るまで「ずっと私そこにいたのよ、お姉さんと一緒に。その暗くて冷たいところに……」「それから三日間、私はひとことも口がきけなかったの。ベッドの中で死んだみたいに、目だけ開けてじっとしていて。何がなんだか全然わからなくて」という状態になった。ここで語られる「暗くて冷たいところ」とは、姉が死んでいる現実の部屋のみを指すのではなく、「死」の世界をも指しているだろう。それは直子が「僕」に語る井戸のイメージと共通する。直子にとっての井戸のイメージは、姉の自殺とその現場での体験の、変容と形象化である。

以上のように具体的に確認すると、直子が辛さを語るのはキズキに関してのみである。しかし「僕」は直子が回復のために忘れるべきこととして「辛い夢」を挙げ、「君を暗闇やら夢やらから守ってあげることができる」とも言う。阿美寮から東京に戻った日の夜も、眠っている直子を想像し、直子が「辛い夢を見ることがないように」と祈る。しかし一九六九年一〇月までに直子が「僕」に語った、眠りのなかで見る「辛い夢」がいかなるものであったかを、「僕」は語っていないのである。

第１節で検討したように、「僕」は直子の幻聴について語っていない場合があると考えられるが、直子が眠りの中で見る「辛い夢」の具体的な内容についても「僕」は語らない。これが忘却によるものではないならば、直子の病的な症状について語ることを「僕」が伏せているということだろう。

という意味」に解釈する。その解釈も適切であると思うが、本稿では、直子の感得する「死」へのいざないから直子を守る者として、「僕」が直子にイメージされているという解釈を優先させたい。

他方で、姉や恋人の自殺を思春期に体験するという過酷な体験を経てきた重篤な精神病者であるはずの直子は、「僕」の語る回想においては自然描写とともに語られることを含めて美化されて語られる。

以上より、「僕」は直子が病んでいることを認識し、精神病者だからと差別的に接するのではなく直子と一緒にいられることを喜ぶという一定の受容的な態度を示しながらも、他方では直子の病的な症状や直子への理解を深めることを忌避していると考えられる。「僕」が直子の病的な症状を伏せつつ他方で直子を美化して語ることによって、そのような内心を隠蔽している可能性があることを確認しておきたい。「僕」は直子に対して「おそろしく静かで優しくて澄んだ愛情」を感じながら、同時に、次節で考察するように直子を理解しないという形をとって、キズキの死によって傷ついた自らの心を防衛していたと考えられる[7]。

3　キズキの自殺の要因と、直子によるキズキの自殺への向き合い

3-1　直子の辛さとキズキの自殺の要因

前節で言及した、直子が眠りのなかで見る「辛い夢」がどのような夢であったかは分からないが、本項では直子が病に陥るほどであった辛さの原因と、キズキの自殺の要因について検討する。

先述のように直子が辛さを語るのはキズキに関してである。直子とキズキとの関係は「三つの頃から一緒に遊んで」「いつも一緒にいていろんな話をして、お互いを理解しあって」「普通の男女の関係とはずいぶん違って」「どこかの部分で肉体がくっつきあっているような」「まるでお互いの体を共有しているような」「自我にしたってお互いで吸収しあったりわけあったりすることが可能だったからとくに強く意識することもなかった」という自他の区別がつかないかのように融合している半身同士のようであった。それゆえにキズキが自殺したあと、直子は「いったいどういう風に人と接すればいいのか私にはわからなくなっちゃったの。人を愛するというのがいったいどういうことなのかというのも」という混乱した状態に陥る。またキズキに望まれ直子自身も喜んで応じる気があっても、直子の身体がキズキに対して開かなかったがゆえに二人には性交が不可能であったことにも直子は辛さを感じていた。

直子は、キズキの自殺と直子自身の精神病の原因を、「二人一組で手をとりあって。普通の成長期の子供たちが経験するような性の重圧とかエゴの膨張の苦しみみたいなものを殆んど経験することなく」「成長の辛さのようなものを」経験しなかったためと解釈している。しかしその解釈だけではなく別の要因も考えられる。

直子の姉は十七歳で、直子が十二歳の時に首吊り自殺をする。直子はその発見者として大きな衝

---

[7] 「はじめに」前掲近藤論文は、「「僕」に内在する病いは、直子や緑と共振し引き合うが、あるところ以上の接近を「僕」は拒む。「僕」の示した<非理解>とは、共感力・想像力の不足によるものではない。それは、自らの病いを顕在化させることを怖れる「僕」の自己防衛なのだ」と論じる。

撃を受ける。それならキズキにとって直子の姉の自殺とは、近所に住む知人の自殺による衝撃だったというだけではなく、キズキは直子が受けた大きな衝撃をも併せて直子から分かたれて受けとったのではないか。直子の姉が自殺した年齢、そして自殺の素振りも遺書もなかったことを、その後キズキは自らの自殺に踏襲し繰り返す。それはキズキが半身的存在であった直子から、その姉の自殺による衝撃を受け取ったことが一因だろう。直子自身もキズキの死に自分の姉の死が影響を及ぼしたこと、直子自らが姉の死の衝撃をキズキへ媒介したことに、気づいていないはずがないだろう。

またキズキと直子の性交がうまくいかなかった要因は、直子の身体的な未成熟がその一つとして考えられるが[8]、姉の自殺という衝撃によって「体の中の何かが死んでしまったみたい」「お姉さんと一緒に」「暗くて冷たいところ」すなわち死の支配する場所にいた衝撃と恐怖によるエロスの凍結が主因ではないか。「体の芯まで凍りついたように」なってしまう恐怖は、直子にときに表出し去らない。

ただし直子は姉の自殺に加えて、直子の父の弟がやはり若い頃に自殺しており直子の父が娘の自殺に際して自分の血筋かと言ったことを「僕」に語る。そのように直子は自らの病の原因を、キズキの自殺だけではなく姉の自殺を含めた生育過程と遺伝に由来するものとも把握している。直子はそれゆえ、「僕」が思っているより自身が「ずっと病んでいる」「その根は深い」と打ち明ける[9]。

直子の辛さは、表層に現れるキズキとの過剰に親密であった関係と彼の自殺だけではなく、その奥にある姉の自殺とその発見、姉の自殺のキズキへの影響によるだろう。そして直子とその姉に自覚がなくても、弟が若くして自殺したという父の傷による影響も受けている。三人の自殺した夭折者たちの「死」への近接と接触が、直子をして「体の芯まで凍りついたように」病ませるのである。

3-2　自殺したキズキに対する直子の「忘れられない」というありかた

一九六九年一〇月の「僕」による最初の阿美寮訪問時、直子は「僕」と二人きりでいる時に、「僕」による直子を理解したいという「好意とか愛情」を「趣味」と捉えた上で、「きちんとして、あな

---

[8] 徳永直彰「『ノルウェイの森』におけるキリスト教的表象――「辺度（リンボ）」をめぐって――」（今井清人編『村上春樹スタディーズ 2005－2007』 若草書房　2008　所収）は、直子と「僕」との性交について「身体の成熟が直接性交を可能にしたにすぎず、ワタナベとの「相性」の良さを裏打ちするのではおそらくない」と指摘する。また徳永論文は直子は「僕」との性交によって妊娠し堕胎した可能性も指摘する。

[9] 清水良典『村上春樹はくせになる』（朝日新書　2006）第 4 章「埋葬された時間 『ノルウェイの森』」は、「直子が言葉にもセックスにも適応できないのは、彼女の魂が思春期の始まりと同時に死に占拠されてしまったからであり、 「生」への意志が基本的に損なわれているからである」と論じる。また深津謙一郎「「鼠三部作」から『ノルウェイの森』へ――一九七〇年の死者の記憶をめぐる村上春樹テキストの変容」（高木信・木村朗子・安藤徹編『日本文学からの批評理論 亡霊・想起・記憶』 笠間書院　2014　所収）は、「僕」が「直子の危機をキズキの死に起因するものと捉えている節がある」のに対して、直子は自身の危機を「姉の自殺が大きく影を落として」いると述べることから「キズキとの「ホモソーシャル」な関係を生きる「僕」の認識枠組みに回収されない直子の他者性が垣間見える」と論じる。なお「僕」によるキズキとのホモソーシャルな関係への志向については、渥美孝子「空白を残したままの成長物語　ノルウェイの森」（『村上春樹がわかる。』 朝日新聞社 2001）でも論じられる。

たの趣味にふさわしい人間になりたいのよ。それまで待ってくれる？」と、つまりは「あなたの愛情にふさわしい人間になりたい」という愛の告白のごときことを「僕」に告げた。それに対して「僕」は「もちろん待つよ」と応じた。ここにおいて二人は互いの好意や愛情を確かめ合ったと言ってよい[10]。しかし二人それぞれが、キズキの自殺による打撃からの精神的な回復のために選択した方法は全く逆であったため、直子の将来的な回復をめぐる認識は二人の間でずれている。

病から永遠に回復しないかもしれない自分をそれでも待つことができるのかと問う直子に対して「僕」は、「君は怯えすぎてるんだ」「暗闇やら辛い夢やら死んだ人たちの力やらに。君がやらなくちゃいけないのはそれを忘れることだし、それさえ忘れれば君はきっと回復するよ」と応えた。これに対して直子は「忘れることができればね」と応える。さらに「ここを出ることができたら一緒に暮らさないか？」「そうすれば君を暗闇やら夢やらから守ってあげることができる」というプロポーズのごとき「僕」の言葉に対しても直子は「そうすることができたら素敵でしょうね」と応える。

直子は、「僕」が直子を全く理解していないことを深く認識している。「僕」が望むようには直子は「忘れることができない」。それを冷徹に認識する直子は、「僕」に「できれば」「できたら」という仮定の空想上のこととしてのみ応じるのである。そして「忘れることができれば回復する」という「僕」の嘘や欺瞞的なありかたにも直子は気づいている。

なぜなら直子より精神的に強いと自負し、直子に忘れることを勧めた「僕」は、「忘れること」をできていただろうか。第二章を確認すると、「僕」はキズキの死後に付き合った女の子と大学進学を理由とする上京に際して別れたが、彼女のことを「忘れることにした」。そしてキズキの死にまつわる何もかもを「みんなきれいさっぱり忘れてしまうことにした」。しかしそれは「うまく行きそうに見えた」のであって、つまりはうまく行かなかった。「どれだけ忘れてしまおうとしても、僕の中には何かぼんやりとした空気のかたまりのようなものが残」り、その空気のかたまりは「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」ということとして、「僕」の「身のうち」に感じられるものへと変容する。そしてただ一人の友人であるキズキの死という個人的な体験を抽象的な命題へと変容させつつ、体験そのものは忘れてしまおう、深刻になるまいと努力して割り切る。

ともあれ「忘れる」と割り切ることによって「僕」は日常現実の世界へ一見うまく適応できているかのようである。しかしその反面「僕」は、直子からは「自分の殻の中にすっと入って何かをやりすごす」ように見え、レイコさんからは「回復」していない人間で、心を「開こうと思えば開ける人」つまり心を閉ざした人として見えている。さらに忘れようとしたにも関わらず、阿美寮へ来たとたんに「僕」はキズキとの具体的な思い出を想起し、直子にそれを話す。直子の死後には、高校卒業と同時に別れた女の子のことも思い出して罪悪感にかられる。このように「僕」は実際には

---

[10] 山根由美恵「「緑」への手記――『ノルウェイの森』――」（山根由美恵『村上春樹　<物語>の認識システム』 若草書房 2007　所収　初出『近代文学試論』40　2002）は、「第一章の末文（筆者注「何故なら直子は僕のことを愛してさえいなかったからだ」。）と相反し、実際は「直子」が「僕」を愛していたと思わせる記述が手記の中に存在する」と論じる。

忘れることができておらず、キズキの死からも癒えていなかった。

それに対して、「忘れられない」ことによって精神を病んだとしても、療養所に入って回復を目指しつつ、安全な場所で心を開くことになれていこうとする直子は、「僕」のように割り切って「忘れよう」と不可能なことを試みて自らをごまかしていない。直子の「忘れられない」というありかたが「僕」からは回復への遠まわりに見えても、直子は「僕」とは異なり心を閉ざそうとはしていない。またごまかしがないだけに、直子は自分自身に対して誠実であったと言える。

しかしその後の直子は、幻聴に脅かされるという自閉的な症状が強まり[11]、最終的には姉と同じ方法を選択して首吊り自殺をする。直子の自殺の直接的な原因は不明だが、レイコさんの言を信用するなら「ただもう誰にも私の中に入ってほしくないだけ」「もう誰にも乱されたくないだけ」という決意だろう。それは「あなたの人生の邪魔をしたくないの。誰の人生の邪魔もしたくないの」という思いと表裏でその思いが反転して内に向いたのであり、「忘れられない」というありかたの先鋭的な帰結である[12]。直子は死によってのみ「忘れられない」というありかたから解放されるのである。

4　直子と「僕」との「生死の境い目」での結びつきと、直子から「僕」へもたらされたもの

本節では、「生死の境い目」で直子と「僕」とが結びついていたという「僕」による認識を検討したうえで、死を選んだ直子から「僕」へもたらされたものについて考察する。

4-1　「生死の境い目」での直子と「僕」との結びつき

---

[11] 柴田勝二「生き直される時間――『ノルウェイの森』の<転生>」（柴田勝二『<作者>をめぐる冒険　テクスト論を超えて』 新曜社　2004　所収　初出『敍説』2　2002–01）は、小説の題名『ノルウェイの森』と直子の自閉との関連を次のように論じる。「「ノルウェイの森」の「ノルウェイ」という地名が、「森」のイメージを強化する形で機能している。「Norway」は語源的には「北方の道」を意味するが、そこには「No way」つまり「道―行き場がない」という閉塞の含意が込められているからである。（筆者注　改行）その点でこの表題が、第三章の末尾に描かれる、「行き場を失った魂」の暗喩としての蛍の光と呼応する形で、直子に付与された自閉の運命を表象していることが分かる。この蛍が「飛び去って」しまうことが、直子の死を意味することはいうまでもなく」。

[12] 中井久夫は統合失調症について次のように述べている。「分裂病には自分が唯一無二の単一人格でありつづけようとする悲壮なまでの努力がありありと認められます。何を措いても責任だけはわが身に引き受けようとする努力です」。（中井久夫『最終講義 分裂病私見』 みすず書房　1998）。また石原千秋『謎とき 村上春樹』（光文社新書 2007）「第五章 『ノルウェイの森』」は、直子を「自分の「責任」で、自分の「物語」を生き」る女性で、自分の決断で死んだという観点から論じる。そして注 4 前掲の渡辺論文は同時代状況より、直子は女性解放の夜明け前に「女が欲望されることによって生きられるという制度のなかで」「女がそれだけでは生きられない主体性が要求される時代との狭間を生きた」と論じる。統合失調症に特徴的な「何を措いても責任だけはわが身に引き受けようとする努力」と、1970 年前後の時代の変化と要請とにより主体的に生きる女性像が日本でも青少年層に受容され始めることと性解放とがはからずも直子において相容れ、直子は主体性の確立や精神的自立を試みる若い女性として表象される。

直子の死後東京へやって来たレイコさんは「僕」に、「僕」が直子の生前から直子ではなく緑を選んでいたことを指摘し、「自分の選んだものにはきちんと責任を持たなくちゃ。そうしないと何もかも駄目になっちゃうわよ」と言う。それに対して「僕」は次のように答える。

> 「でも忘れられないんですよ」
> 「僕は直子にずっと君を待っているって言ったんですよ。でも僕は待てなかった。結局最後の最後で彼女を放り出しちゃった。これは誰のだとか誰のじゃないとかいう問題じゃないんです。僕自身の問題なんです。たぶん僕が途中で放り出さなくても結果は同じだったと思います。直子はやはり死を選んでいただろうと思います。でもそれとは関係なく、僕は自分自身に許しがたいものを感じるんです（略）僕と直子の関係はそれほど単純なものではなかったんです。考えてみれば我々は最初から生死の境い目で結びつきあってたんです」

まず、直子の自殺と、「僕」が「緑を選んだ」こととのあいだには、因果関係はないはずである。仮にその二つに因果関係があったとしても、自らの病に関する問題や人生の責任を我が身に一人で引き受けようとし続けた直子の個の尊厳を守るのであれば、「僕が途中で放り出さなくても結果は同じ」「直子はやはり死を選んでいただろう」と「僕」が考えることは、無責任な詭弁ではなく、「僕」による直子という一人の人間に対する尊重である[13]。

しかし「緑を選んだ」ことはさておき、「僕」は、自分が直子にずっと待っていると言ったのに待てずに直子を放り出したことについて、「自分自身に許しがたいものを感じる」という。なお「僕」が直子を待てずに放り出すにあたって採った手段は緑を選ぶことであったが、他の契機や手段によって「僕」が直子を放り出す場合もあり得たと考えられるので、この手段が採られたことは偶然[14]で

---

[13] 鈴木智之「記憶・他者・身体：村上春樹『ノルウェイの森』と自己物語の困難」（『社会志林』50‐2　2003）は、「「僕」にとって、「緑」との関係と「直子」との関係はそれぞれに別々に進展していくものであるし、「直子」 の物語の顛末は、「緑」と「僕」との関係とは無関係なところで生起している（「直子」は、「僕」が「緑」との決定的な関係を持ったから「死」を選んだわけではない）」と論じる。

[14] 中村三春「<見果てぬ>『ノルウェイの森』」（石田仁志／アントナン・ベシュレール編『文化表象としての村上春樹　世界のハルキの読み方』 青弓社 2020　所収）は、「ある者がほかの者に対する反転または代理として表象されるならば、特定の者を固定的に特権化することはできない。直子／緑の対照がその典型だが、結局のところ、「僕」（でも誰でも）が選ぶべき相手は、本来誰でもいいのである。それが直子や緑でなければならない理由はどこにもない、というよりも、仮にその理由が見いだされたとしても、その反転や代理についての理由もまた、同じだけ有効になるだろう」と論じる。そもそも「僕」は直子も緑も自分からは選んでいなかった。ところで大島弓子の短編漫画「ダリアの帯」（『月刊ぶ～け』1985 年 8 月号掲載　のち『四月怪談』　朝日ソノラマ　サン・コミックス・ストロベリーシリーズ 1987.9　収録）における妻と夫との関係は、『ノルウェイの森』における直子と「僕」との関係とは対照的で、統合失調症と思しき病を発症し自閉していく妻を、他の女性との出会いもあり放り出そうとした夫が転回し、病んだ妻と添い遂げ、死後に妻が病んでいたのではないと気づくという漫画である。なお「ダリアの帯」は初出こそ『ノルウェイの森』に先行するが、単行本に収録され発売されるのははからずも『ノルウェイの森』の単行本発売と同年同月である。二つの作品はどちらも当時の若い女性に読まれたが、直子や「ダリアの帯」の妻のように統合失調症を病む女性像が描かれることもまた注 2 での指摘同様に時代の要請であったとすれば、『ノルウェイの森』が 若い女性に受容された要素の一

ある。2-2で検討したように、「僕」は病んだ直子に向き合うことを避け、自らの心を防衛し、その内心を伏せて語っている可能性がある。

さて「僕」はその許しがたさを、二人が「最初から生死の境い目で結びつきあってた」ことにもとめる。それは二人におけるキズキという死者の共有に端を発するもので、二人のあいだに愛情関係や性愛の関係があるかどうかは関係がない。そして「考えてみれば」とあるように「僕」は直子の生前にはそのことが意識にのぼらず気づいていなかった[15]。

直子が死を選び「生死の境い目」から離脱したことを考えると、直子は死の世界と「生死の境い目」との二つのフェーズに存在する。そして「僕」と緑との関係は、生き生きとした生命的な、生の世界に属するような関係であり、緑は生の世界に存在する。そして死ななかった「僕」は、生の世界と「生死の境い目」との二つのフェーズに存在する。したがって「僕」は、「生死の境い目」というフェーズでは直子と結びつき、生のフェーズでは緑と結びついている。

「僕」が直子を待つということは、換言すれば「生死の境い目」というフェーズに在り続けることである。「僕」が考えたように「僕が途中で放り出さなくても結果は同じ」「直子はやはり死を選んでいただろう」ということであるなら、いつかは「僕」と「直子」は、「生死の境い目」というフェーズに共に在ることから放たれて、「直子」は死の世界へ、「僕」は生の世界へ移行しただろう。あるいは何かのはずみで「僕」の死の世界への移行もあり得ただろう。

いずれにしても「僕」にとって直子の死は納得のいくものではなかった。「僕」は直子のお葬式と死についてレイコさんに次のように言う。「ねえ、あれは本当に淋しいお葬式だったんだ。人はあんな風に死ぬべきじゃないですよ」。「僕」の自分自身に対する許しがたさは、「生死の境い目」で結びついていた相手であると認識する直子が「あんな風に死ぬべきじゃない」と思われる見送られ方をしたことも一因だろう。直子が自殺しても、「僕」を含めて直子を知る人たちが哀惜をもって見送るような良い葬儀であったなら、「僕」はまだしも直子の死を納得して受け入れられたのではないか。

以上を踏まえて「僕」にとって直子との関係がどのような経緯をたどれば良かったのかを考えると、まず「僕」は「生死の境い目で結びつきあって」いた相手である直子を、うかつにもそれと思い至っていなかった。「僕」がそのことに思い至り、直子が死を選び自殺するまで、直子と「生死の境い目」というフェーズで共に在り、永遠に回復しないかもしれない直子の回復を待ち続ける。そして死の世界へと旅立つ直子を納得して見送った後で、「何かしら決定的なもの」が二人のあいだに存在し「その力に抗しがたいものを感じ」るという緑を選び、生のフェーズに移行する、または「僕」が直子より先に死ぬことだろう。しかし順番通りにはことは運ばなかった。

つは直子像にあり、80 年代に至って女性が主体的に生きることの要請や試みが大衆化したことによって、それゆえの病や苦渋もまたあまねく若い女性に共感されやすいものとなっていたのだろう。

[15] 「はじめに」前掲の近藤論文は「いつでも遅れて到来する「僕」の気づき。だが、「僕」は気づいた時点で、気づかれずに通過した問題を再検討し、関わり損ねた者との関係を修復することはない。遅れは、起こっている出来事との対決を先送りし、それを取り返しのつかなさの中に葬り去る。直子や緑が「僕」のもとから去らずにはいられなくなるのも、おそらくはそのためだ」と論じる。

４-２　「どのような真理をもってしても愛するものを亡くした哀しみを癒すことはできない」という認識は誰のものだったか

第一章でこの文章を書き始めた「僕」は「直子に関する記憶が僕の中で薄らいでいけばいくほど、僕はより深く彼女を理解することができるようになったと思う」と述べるが、十八年後に至っても「僕」が「直子」をより深く理解したとは言い難い。

「はじめに」で確認したように、「僕」は直子の死によって「どのような真理をもってしても愛するものを亡くした哀しみを癒すことはできない」という認識を得た。その認識を十八年後の三七歳まで保ち続けている。けれどもその認識から類推して、キズキを愛した直子が、キズキを亡くした哀しみを癒すことはできない、すなわちキズキを忘れることができない、そのことが直子にとっていかに辛いことであったかとは思い至らない[16]。この認識はそもそも直子のうちにあったものである。

直子の「症状」がキズキの死後から始まっていたとレイコさんの言うのが本当であったなら、直子の病的な「症状」とは、姉の自殺などを含めた根深さによるだけではなく、そこにキズキという「愛するものを亡くした哀しみ」が重なっての辛さに耐えかねた直子の哀しみの変形でもあっただろう。そしてそのような直子の深い哀しみを分かち持とうとは、かつてのキズキが直子の姉の死に際して直子にした、あるいはせざるを得なかったようには、「僕」は直子になし得なかったのである。

他方で直子は「僕」に対してどうであっただろうか。キズキを「忘れよう」と試みたがゆえに、キズキの話を東京で避けたのは、直子ではなくむしろ「僕」であったのではないだろうか。阿美寮に来たとたんに「僕」はキズキとの思い出を想起し、また直子にキズキの話を持ちだした。直子はそれが自分にとっては話したくないようなことであっても話をはぐらかしたり避けたりはしなかった。直子が「僕」を愛してさえいなかったと「僕」が考えるのは、直子がキズキを愛していたからであろうが、３-２で検討したように直子は「僕」の愛に応えようとしている。そしてキズキの自殺のあとに自殺したのは「僕」ではなく直子であった。また「僕」は直子が死ぬことによって自分ではなくキズキの方を選んだと考えている。しかし直子はかつてキズキが自分にしてくれたように、「僕」のなかにあったキズキの死による哀しみを分かち持ち引き受けて死んでいったとも考えられる。そうであれば直子の死の一部は直子から「僕」へ向けられた愛の表現だが、「僕」はそうとは考えない。

直子と「僕」とが最後に会った、阿美寮への二回目の「僕」の訪問時に、二人は自然な会話とし

---

[16] 直子の葬儀について若い「僕」は、「すごくひっそりとして、人も少なくて。家の人は僕が直子の死んだことをどうして知ったのかって、そればかり気にしていて。きっとまわりの人に自殺だってわかるのが嫌だった」と語る。しかし「僕」は娘を亡くした親の悲しみを察することはなく、その親から見て「僕」が胡散臭い赤の他人であることにも思い至らない。このように「僕」は他者からものごとがどう見えるのかをしばしば捉え損ない、自身の観点からしかものごとを見ないのだが、そのことも「僕」が心を閉ざしていると他者から見える一因だろう。

てキズキの話が出来ている。「僕」は「彼女は少しずつキズキの話ができるようになっていた」と語るが、むしろ逆で「僕」の方こそがそうであったのではないか。「僕」は直子と一緒にいて、直子とキズキの話が出来るようになっていくことで、キズキの自殺による傷が少しずつ癒えていっていたのである。

「僕」が直子へ向けた愛は、直子を理解しようとつとめ、直子を守ろうとすることであった。それは直子から「僕」へ向けられていたと考え得る、他者の傷みを静かに受容し分かち持ち引き受ける愛とは、かくも異なる。そしてそれらはいずれも直子が理想的に思い描いた対等な人間関係ではない。「僕」の側は直子の深い哀しみや傷みを分かち持とうとはしなかったからである。

おわりに　アドレセンスと死と

「僕」は直子の死によって「どのような真理をもってしても愛するものを亡くした哀しみを癒すことはできない」と知った。キズキの死に対しては「忘れよう」と試みた「僕」は、「直子」の死に対してはそうせず、哀しみが癒えずに保たれ続けることにより、その哀しみの原因となった愛するものである直子を「忘れられない」ことを受容する。もちろんそれは直子が自分のことを覚えていてほしい、忘れないでいてほしいと「僕」に「おねがい」したのを「僕」が受けとめたからでもあろう。さらに「忘れられない」ということには、「僕」の自分自身に対する「許しがたさ」も影響を及ぼしている。

「僕」はキズキの死を共有し「生死の境い目で結びつきあって」いた相手である直子を、うかつにも直子の生前にはそれと思い至らず、直子を待たずに途中で放り出した。そのため「僕」にとって直子との関係は、直子の死という不測の事態によって、途中で終わった、やり直しのきかない一回限りのこととなった。「許しがたさ」とは、結果として「僕」が自身で納得のいくようには直子と関わりきらなかったこと、永遠に次の機会は訪れないということによる悔恨である[17]。そしてなお「僕」はキズキの死による傷を直子によって癒されていた可能性には思い至らない。

東京で再会した「僕」と直子は、東京の街を「あてもなく歩きつづけ」た。それは「まるで魂を癒すための宗教儀式みたい」だと「僕」は語った。直子の認識がそうであったかは分からない。しかしその歩行は「僕」にとってはそうであり、「僕」にこそ、キズキの自殺によって傷ついた「魂

---

[17] 野中潤「『ノルウェイの森』と生き残りの罪障感」（宇佐美毅・千田洋幸編『村上春樹と一九八〇年代』　おうふう　2008　所収）は、『ノルウェイの森』が論じられる場合に「喪失感」という言葉で「僕」の感情が説明されることに疑義を呈し、「喪失感」という言葉は「「悔恨」のような感情を軽視」し、「自らの無力に対する諦念とともに、それとは矛盾する自己処罰への衝動が隠されている」ことに十分に応えていないことを指摘する。そして「「救うべきだったのに救うことができなかった」という悔恨から、「罪障感」とでも呼ぶべき感情へはほんのひとまたぎの径庭しかない」「『ノルウェイの森』をひとつの典型とする村上春樹の小説は、罪障感を半ば抑圧しながら喪失感へと転化させる詐術を孕んでいる」と指摘する。本稿での「僕」の自分自身に対する「許しがたさ」の所以は、野中の論ずる「罪障感」の手前にある「悔恨」に踏みとどまりたい。

を癒すための宗教儀式」みたいなものが必要だったのだろう。そして自分がいたことを忘れないでほしいという直子との「約束を守る」ために「僕」は「この文章を書きつづけ」るのだが、それもまた「僕」が自らの「魂を癒す」ために必要なことだっただろう。

そこで「僕」の魂が癒えるために必要なことは具体的にどのようなことだったのだろうか。「僕」はキズキを亡くしたことによって、自分の「アドレセンスとでも呼ぶべき機能の一部が完全に永遠に損なわれてしまったらしい」と認識していた。その後、身近で親密な関係にあった人々が亡くなり精神を病んでもアドレセンスを保ち続けたようであった直子は自殺した。そして他者のアドレセンスを「共震」させる力を持ち、「僕」のそれを共震させたハツミさんも自殺した。この物語で「僕」にかかわってアドレセンスすなわち思春期の心性という機能を担った三人は自殺によって夭逝するが、「僕」は三七歳まで生き続けている。

「ノルウェイの森」を聴くと「すごく哀しくなる」「自分が深い森の中で迷っているような気になる」「一人ぼっちで寒くて、そして暗くって、誰も助けに来てくれなくて」という気持ちになると直子は語った。十八年後に至ってもまだ「ノルウェイの森」を聴くと混乱し動揺する「僕」が、直子から受け取ったものは、直子が「ノルウェイの森」を聴いて感じたような死に接する不安や恐怖の心性であり、それはアドレセンスの心性の暗い側面である。直子の死は「僕」には「彼女自身の心みたいに暗い森の奥で」「首をくくった」とイメージされており、直子の語った井戸は、「僕」には「おそろしく」「見当もつかないくらい」深く、「穴の中には暗黒が——世の中のあらゆる種類の暗黒を煮つめたような濃密な暗黒が——つまっている」とイメージされている。それらは直子のアドレセンスの心性に共震した「僕」の内なるアドレセンスの発露である。

他方で、直子と「僕」とが「生死の境い目」で結びついていたからこそ、直子の死後に「僕」は死者と生者とが共存する「奇妙な場所」へ行くことが可能であった。その場所では「僕」は哀しみを感じずにいられ、直子は恥ずかしそうに笑い、また「すごく楽」でいられる。それはまた「無垢」というアドレセンスの心性の明るい側面である。

「どのような真理をもってしても愛するものを亡くした哀しみを癒すことはできないのだ」という認識に「僕」が至ったのは、「僕」が死んだ直子を愛していたからだけではない。直子との関わりによって、「僕」に明暗双方のアドレセンスの心性が体験され、キズキの死によって損なわれた「僕」の内なるアドレセンスがいくばくとも回復したこと、そして直子がかつてキズキの死によって経験した「どのような真理をもってしても愛するものを亡くした哀しみを癒すことはできないのだ」という認識が、たとえ「僕」に自覚されずとも、直子から「僕」に受け渡されたことにもよる。それらは日常現実の世界では病的な状態にあると見なされた直子が、「生死の境い目」である「奇妙な場所」において死者として「僕」と共存したことを含めて、「僕」にもたらしたものである。かつそれらは日常現実の世界での生者には、「哀しみ」としてしか認識され得ない死の美しさである。

＊『ノルウェイの森』の引用は、講談社文庫版（上巻1991年4月発行・2002年7月第41刷、下巻1991年4月発行・2002年９月第40刷）に拠る。

＊本稿脱稿後に刊行された論文集、小島基洋・山﨑眞紀子・高橋龍夫・横道誠編『我々の星のハルキ・ムラカミ文学　惑星的思考と日本的思考』（彩流社　2022.10）第９章にあたる山﨑眞紀子「『ノルウェイの森』誕生の地ローマ・トレコリレジデンス探訪記」を確認した。山﨑はこの論文で「『ノルウェイの森』は、忘れないでいることの難しさ、また、忘れてしまうことはどれほどの傷(いた)みを伴うのかを描いた作品であり、そのテーマと合致するのがローマなのではないだろうか」と指摘しており、本稿３-２、４-２で論じたことと関わる。

＊本稿執筆にあたり、山根由美恵先生から貴重なご教示をいただきました。記して深謝申し上げます。

【石原深予　（日本近代文学）】